

佐賀の果樹7月号 今月の管理（病害虫防除）

梅雨期の薬剤防除は予定通りに行えましたか。梅雨があけると気温が高い日も多くなりますので、体調に注意して適期の防除や管理作業につとめて下さい。

<果樹類共通>

今年はカメムシ類の越冬量が多かったため、8月上旬頃までの発生は多いと予想されています。すでに、5月中旬ごろから予察灯などでの誘殺数が多くなり、果樹園への飛来も確認されています。カメムシ類の発生状況や飛来状況は地域や園によって異なりますので、園内をよく観察して発生状況に注意し、カメムシ類が認められたら早急に防除を行いましょ。今後のカメムシ類の発生量と果樹園への飛来予測時期については、農業技術防除センターが発表する各種情報及びホームページ（<http://www.pref.saga.lg.jp/kiji00321899/index.html>）に掲載されますので、参考にして下さい。

<露地カンキツ>

○黒点病

まずは、伝染源となる枯れ枝や放置してある剪定枝等を園内から除去して適切に処分しましょう。また、切り株がある場合は、肥料袋などで覆いましょう。薬剤防除では、マンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）単用の場合は、前回の散布から累積降雨量が200～250mmに達した時点（6月の散布時にマシン油乳剤を加用した場合は300～400mm）もしくは薬剤散布1か月後を目安に再散布を行って下さい。マシン油乳剤は、7月以降に使用すると果実の糖度低下や腐敗の増加を招くことがあるので、6月までの使用としてください。

なお、降雨量を目安にして散布を行いますが、气象台で観測された降雨量と自園地の降雨量は異なる場合があります、防除適期を逃してしまう可能性があります。簡易雨量計を設置して、降雨量を確認しながら園地にあった散布時期で的確に防除を行いましょ。

○チャノキイロアザミウマ及びミカンサビダニ

7月中旬は、これらの害虫の同時防除の適期です。コテツフロアブル4,000倍、マッチ乳剤3,000倍、ハチハチフロアブル2,000倍等のいずれかを散布して下さい。

○カイガラムシ類

近年、カイガラムシ類の発生が多い園が散見されます。6月には防除をされていると思いますが、7月中旬が2回目の防除のタイミングとなります。かけムラが無いように丁寧に薬剤散布を行って下さい。

○ゴマダラカミキリ

幼虫が木部に食入すると防除が困難になるので、産卵～若齢幼虫期に防除を徹底します。

7月中旬までにエルサン乳剤 1,000 倍またはモスピラン SL 液剤 2,000 倍、ダントツ水溶剤 2,000 倍、スプラサイド乳剤 40 1,500 倍等のいずれかの薬剤を、枝幹～地際部を中心に散布して下さい。食入した幼虫に対しては、捕殺するか園芸用キンチョール E やロビンフッドを使って防除して下さい。

<ハウスミカン>

○アザミウマ類

ハウスへの侵入を抑制するために、園内外の除草作業と、光反射資材の設置等の対策を必ず行ってください。また、アザミウマ類の種類によって効果の高い薬剤が異なるため、対象の種に合った薬剤を選択する必要があります。アザミウマごとの薬剤については、先月号に記載していますので、参考にして下さい。

<不知火>

○汚れ果症

施設栽培の‘不知火’では、赤道面から果頂部側に集中して黒点症状が生じる「汚れ果症」が問題となります。露地栽培の黒点病防除と同様に、マンゼブ水和剤を累積降雨量 250mm または薬剤散布後 1 か月を目安として散布すると、高い効果が期待できます。ただし、園内の湿度が高く結露が長時間にわたって続くような園では十分な薬剤防除の効果が出ませんので、換気などを行って適正な湿度管理に努めてください。また、薬剤はかけムラがないように丁寧に散布して下さい。

<ナシ>

○黒星病

6月下旬から7月上旬は、黒星病が果実に最も感染しやすい時期です。6月下旬にスコア顆粒水和剤等の DMI 剤を散布されたと思いますが、葉に黒星病が発生している場合や雨が続いた場合、また毎年収穫直前に被害が発生する園などは、7月上旬にも再度 DMI 剤を散布して下さい。

○ナシヒメシンクイ

梅雨期間中の長雨で殺虫剤の散布間隔が開いてしまった園では発生が多くなる場合があります。散布間隔が 10 日以上開かないように防除を行ってください。交信攪乱フェロモン剤を設置している圃場でも、園外から交尾済みの雌が飛来し被害が出ることがあるため、10～14 日の間隔で薬剤を散布して下さい。なお、‘幸水’では果実に薬液の汚れが残りやすいので、フロアブル剤を使用して下さい。

○ハダニ類

収穫が近づいてきているので、果実の汚れの発生が少ないコロマイト水和剤 2,000 倍(収穫前日まで使用可)やスターマイトフロアブル 2,000 倍(収穫前日まで使用可)等で対応します。発生初期にしっかりと防除するように心がけて下さい。

○ハウスナシの収穫後の薬剤散布

収穫が終了したら、黒星病や炭疽病などを対象としてデランフロアブル 1,000 倍や、キノンドーフロアブル 1,000 倍等の保護殺菌剤を散布して下さい。なお、ハダニ類や枝幹を食害する害虫の発生が多い園では殺虫剤も混用して下さい。ただし、収穫が終わっていない園が近くにある場合は、周辺のナシ樹等に薬液がかからないよう、農薬の飛散には十分注意して散布を行うようにして下さい。

<ブドウ>

○枝膨病

果実肥大期から袋かけ終了までは果房の汚れ等の問題で枝膨病に効果の高い剤を散布できないため、菌が既に感染している可能性があります。袋かけが終了した後は、本病に対して効果の高いストロビードライフロアブル 2,000 倍を散布し、蔓延を防ぎましょう。

○べと病

曇雨天が続くと発病が多くなる傾向にあります。薬剤は、IC ボルドー66D 50 倍、IC ボルドー48Q 50 倍のいずれかを散布します。散布間隔は 20 日以上開かないように注意して下さい。いずれの薬剤もアピオン E を加用すると防除効果が高まります。

<キウイフルーツ>

※キウイフルーツは品種によって使用できる薬剤に制限があるため、暦や関係機関の指導に従って薬剤を使用してください。

○果実軟腐病

まずは伝染源となる枯枝、剪定枝等を園外へ除去し処分して下さい。薬剤は、フロンサイド S C 2,000 倍(収穫前 7 日まで使用可)、アリエッティ水和剤 600 倍(収穫前 120 日まで使用可)、トップジン M 水和剤 1,000 倍(収穫前日まで使用可)等のいずれかを散布して下さい。ただし、アリエッティ水和剤は収穫前使用日数が 120 日と長いため、収穫までの日数に注意して薬剤を選択して下さい。果実だけでなく枝葉にも薬剤が十分に付着するよう丁寧に散布することが重要です。

○すす斑病

6 月～7 月はすす斑病菌の果実への感染が起こる重要な時期です。まずは防風樹の刈り込みや除草作業を行って園内湿度を低下させるなど、すす斑病が発生しにくい園内環境にしましょう。ベンレート水和剤 2,000 倍またはダコニール 1000 500 倍、ストロビードライフロアブル 2,000 倍のいずれかを散布して下さい。果実だけでなく葉の表裏、棚面の上の方にある枝先にも薬液が付着するように十分量を丁寧に散布して下さい。特に、遅くま伸びているような枝には発生が多くなりますので、かけムラが無いようにしっかりと散布して下さい。